AL NEWSLETTER
アクティブラーニングニュースレター
Volume 11, No.2
October 2025

～ 目次 ～

◆ アクティブラーニングニュースレター(p.1)
◆ アクティブラーニングとは？ (p.1)
◆ 授業とアクティブラーニングのリアル：教員対談（2）
・ 授業を行うときに譲れないこと(p.1)
・ アクティブラーニングのメリット(p.2)
・ アクティブラーニングのコツ(p.3)
◆ 今後の活動予定(p.4)

◆ アクティブラーニングニュースレター

学習効果を高める方法の一つとしてアクティブラーニングがあります。アクティブラーニングは駒場アクティブラーニングスタジオ（KALS、東京大学駒場キャンパス 17 号館 2 階）といった特別な設備があるところで行うこともありますが、通常の教室でも行えます。授業の一部にアクティブラーニングをとりいれる際に、参考になるように、本ニュースレターでアクティブラーニングのさまざまな方法や関連する話題をお知らせいたします。気になる記事がありましたら、東京大学教養学部附属教養教育高度化機構 Educational Transformation(EX)部門（旧アクティブラーニング部門と初年次教育部門・自然科学教育高度化部門が統合する形で 2023 年 4 月に新設）までお問い合わせください。（若杉）

◆ アクティブラーニングとは？

アクティブラーニングとは、データ・情報・映像などのインプットを、読解・ライティング・討論を通じて分析・評価し、その成果を統合的にアウトプットする能動的な学習のことです。

講義でのインプットに対して、試験や課題でアウトプットすることは普段から行われていると思いますが、それだけで深い理解を獲得させるのはなかなか困難です。アクティブラーニングでは、その途中に読解・ライティング・討論など、学生が中心になって行う活動を取り入れることにより、より深い理解を獲得させるものです。一人で読んだ時は気がつかなかった観点を他の学生の見方から知ったり、他の学生の発表に質問することでより広がりをもって問題を捉えることができるようになります。

単に討論をすればアクティブラーニングになるわけではなく、どのように進めれば有効かについてさまざまな知見があります。このニュースレターでは、そのような方法をいくつか紹介していきます。（若杉）

◆ 授業とアクティブラーニングのリアル：教員対談（2）

AL NEWSLETTER 10 巻 4 号で取り上げた、教員対談の続きをお届けします。（中村長史特任講師は 2025 年 3 月末をもって東京大学を退職しました。）

授業を行うときに譲れないこと

中澤：授業を行う時に譲れないことや信念はありますか。

中村：そうですね。何のためにその授業をやっているのかということですね。つまり、目的と目標でいうところの目的です。学生がこういう状態に到達してほしいという目標はもちろんあるのですけれども、それよりももう一段上の、何のためにこの授業をやっているのかですね。それが大切だと考えています。僕の場合、それは「善き市民になる」ことです。ほんとに意識しています。分野が政治学ですから、学生全員が政治家になったり官僚になったり、具体的に政策決定するわけではないですけど、ただ有権者には確実に全員なるわけなので。そこを意識していますね。

授業の初回に必ず言っているのは、お題目ではなくて、本当に皆さん一人一人の考え方や行動によって、世界は今よりさらに悪くなる可能性もあるし、ちょっとはましになる可能性もあるんですよということです。そこは強く意識しています。

中澤：授業の存在意義をしっかりと意識し、それを学生に伝えるようにしているのですね。学生とのコミュニケーションや授業運営で譲れないことはありますか？

中村：これまで東大で教えてきた 5 年間、困ったことがあまりなかったのは、学生のレベルが高くて良かったからなのかなと思います。うるさいと注意したこともないし、やりやすかったなと思っています。そういう意味であまり悩まなかったから、今答えがすぐに出てこないのかもしれないですね。

ただ、すぐに答えを求めてくる学生がたまにいて、それは違うよと伝えることは譲らないかな。つまり、「これ答えを聞きに来てるな」と思っても、考え方やヒントはもちろん伝えるのですけれども、答えそのものは言わないようにしています。考えた上で分からないならもちろん言いますけれども、すぐには言わないということはありますね。

中澤：確かに、答えがあると思っている学生がいますよね。

中村：それは、ますます意味がなくなってきていると思います。国際政治を専門とする人間は結構今感じてると思うのですけれども、自分たちが学生の頃と世界が全然違ってきていて。今まで考えていたことが通用しなくなってきているのですよね。そうなると、今教えていることは暫定的なものでしかないので、それを知って喜ぶよりは、そこに至るまでの考え方や、どこを調べたらそれが分かるのかとか、そういうことを身に付けたほうがより汎用性があるのでいいのかなと思います。

中澤：学生が答えを求める質問は、クローズドなものが多いですよね。これは正しいですか、正しくないですかという質問のように。できればクローズドでない質問をしてもらいたいですよね。

中村：ただ、学生の気持ちは分かるのです。今の学生は本当に忙しいですよね。この 20 年ぐらいで社会の雰囲気が変わったなと感じます。余裕がないというか・・・いつも追われてますよね。

「タイパ」という言葉が流行っていることが象徴的だと思うんですけど、手軽に、最短距離で、答えなるものに到達したいという欲望がすごく強くなっていて。楽したいと思う学生ももちろんいるのかもしれないですけど、どちらかというと、社会がそうさせているよなと思います。

中澤：私は学生に「二元論で考えるな」と伝えています。この前の授業でも、生成 AI を使ったほうがいいですか、使わないほうがいいですかと学生が聞いてきたのですよね。それに対して私は、イエス、ノーではなくて、どのように使うかや、なぜ駄目なのかを考えようね、そういう考え方をしようねと伝えました。イエス、ノーで答えることはわかりやすいのですけれども、学生にはそうではない考え方をして欲しいですよね。

中村：せいぜい入口の質問ですよね。役に立ちますか、立ちませんかというのも。そこを入口にして、じゃあ、役に立つと考える場合はどういう状況があり得るのか、役に立たない場合はどういうのがあるのかと、列挙して比べてと進んでいくのだったら、そのファーストステップとしてはいいかもしれないですけども。そこで止まっていてはちょっと、進まないですね。

アクティブラーニングのメリット

中澤：アクティブラーニングのメリットはなんだと思いますか。

中村：どの授業でも毎回アクティブラーニングといわれるような授業をしてきたと思います。もはや、アクティブラーニングではない授業をするほうが、やり方が分からないです。当たり前になり過ぎちゃっていますけれども。

でも、当たり前だと思わなきゃいけなくなったのではないですかね。この 5 年間の一番大きな変化は、パンデミックだと思うのですけれども。あれを契機に感じたことは、対面授業でみんなが集まっているならではのことをしなきゃいけないということだったのですよね。きっとみんなが痛感したはずなんです。それでは今、みんながそういうならではのことをできているのかということは、もう一度問い直したほうがいいと思います。

一方向的に教え込むのであれば、動画でよくなっていて、それが効率的な場面がもちろんあります。教室に集まるんだったら、もはやアクティブラーニング以外のやり方があるのですかと思いますよね。

中澤：そうですよね。もう少し大きく言うと、大学に来る意味ですよね。

中村：ほんとそうです。それは考えたほうがいいと思っています。

あと、どんな大学でも当てはまるメリットがあります。今から言うことは、誤解を恐れずに言うので、そうじゃないケースはたくさんあると思うのですけれども。一般的に、中学まではアクティブラーニングはあったけど、高校はあまりなかったという学生が多いです。そうではない高校ももちろんたくさんあるのは知っています。でも、そういう学生の中で、そんなに勉強好きではないのだけど大学に来ましたという学生も当然います。そんな時にもアクティブラーニングはいいと思います。つまり、高校までの勉強があまり楽しくなかった、あまり身に付かなかった学生に、高校の時と同じやり方で大学の勉強を教えても意味がないと思うのです。同じことが繰り返されるだけで、結局学問にも興味持てない、身に付かないことになるので。そういう意味でもアクティブラーニングは必要ではないですかね。

中澤：中村先生と担当していた授業で、これまでで印象に残っている授業を思い出してもらった時に、印象に残っている授業はないと言っていた学生がいましたよね。あれは衝撃的ですよね。あの学生にとっては、私たちの授業がどのように映ったのかなというのは気にはなります。

中村：そういう教育を受けて東大に来てるからいいのかもしれないですけど、でも、そういう教育になじめなくて、高校時代に勉強が苦手だなって思った人って絶対いるんですよ、日本にいっぱい。そういう人たちが大学に来てくれた時に、ちょっと違う学びのやり方があるよということを示し、選択肢を広げてあげないといけないのではないかと思います。

中澤：そうですね。まさにその話を、この前の授業で話しました。学生は、従来の学び方ではうまく学べなかった子がいるかもしれないという視点はあまりなかったみたいですね。

中村：そうですよね。もうだいぶ前の話なので、今はそんなことないのかもしれないですけど、アクティブラーニングの話をすると、「東大ではいいかもしれないけど、うちみたいな学校ではできない」とおっしゃる人がいたのです。逆だとまでは言わないけれども、お宅こそやったほうがいいですよということは思いましたね。

アクティブラーニングのコツ

中澤：先生は「教える」ことにこだわりがちかなと思うことがあります。「教える」と「説明する」、「学ぶ」ことは違うことなので。どうやって先生が「教える」ことから脱却できるかが大切だと思います。中村さんはアクティブラーニングを実践することになったきっかけはありますか？

中村：僕は、恵まれていたのかもしれないですね。人生で一番いい授業だと今でも思っている授業が、ソクラティックメソッドですかね、先生がマイクを持って聞いてくるスタイルだったのです。大教室の授業なのに。「どう思いますか」とか「なぜそう思うんですか」と聞いてくるタイプの授業で、すごくエキサイティングでしたし、全然ぼーっとすることはなかった授業でした。自分もそういう授業をしたいという、モデルになる授業に学生時代に出会えたのですよね。初めて大学で教えたのは、非常勤講師をやった 2017 年なんですけど、その時もそういう授業をしてました。最初からできていたかはともかくとして、志向していました。

中澤：なるほど。モデルがあるといいですよね。

中村：ただ、そういうモデルがない場合は、本当に「脱却」ですよね。マインドセットを変える、考え方を変える話だから、難しいなと思います。

想定外のことが来たらどうしようと思うタイプの先生は、アクティブラーニングに苦手意識を持たれると思うのです。つまり、真面目な先生で、学生から質問が来たらきちんと答えたいと思われる方ほど、自分が全然予期していないことを学生が言い出したり、やってきたりした時にどう対応したらいいかという不安があって、ついついマニュアルどおりの一方向の授業になってしまう。自分が一方的に話す限りは、ハプニングは起きないので、そういうことになるのかなと思います。

中澤：授業をすることの認識も違うのかなと思います。授業ってコミュニケーションの場だと思うのです。計画どおりに授業する先生たちは、計画をそのまま実行することが授業だと思っているのかもしれません。

中村：そう。そこが違うのです。ハプニングだと思っている時点で違っていて、ハプニングがないと本来駄目というくらいの話なのだと思います。

ましてや、それを教室でやっているわけなので。動画なら一方通行で話して予定どおりいくのですけど、目の前に生身の人間がいるので、それなりにハプニングが起きるよということで、肩の荷を下ろしていただけるといいのかなと思いますね。

中澤：そうですね。そうは言っても、想定外のことが起きたらどう対処したらいいんだと思う先生もいると思います。何かアドバイスはありますか。

中村：いろいろなパターンがあるのではないですかね。何か頓珍漢なことを学生が発言した時に、おろおろしちゃうタイプの先生は、たぶん優しさ故だと思うんですよね。その子がかわいそうだとか、友達に「何あほなこと言ってる」って思われたらどうしようとかと思われるのかもしれないですけど。あらかじめ、変な答えが来た時にどう回収するかを予期して準備しておけばいいのではないですかね。僕はそうしてます。

毎週の授業で、クラスの雰囲気がだんだんあったまってきたら、そういうことを気にしなくてもよくなってきますけど。学期の最初や、ゲスト講義のようにその場限りの関係だと、気まずい感じの雰囲気になると良くないので。あさっての方向の答えが来ても回収できるように、できるだけその子の答えを引き受けて、「そういうふうに考えるとしたら、こういうふうなことは言えますね」とか言って、「しかしそれは違うんですよ」と、ちゃんと軌道修正もするようにしています。腕は必要かもしれないですよね。ただ、心構えとして準備しておくだけでもだいぶ変わるのではないですかね。

中澤：初等中等教育なら教育実習で学習指導案を書く時に、そこまで考えるようにと言われることがありますね。教師からの発問は何で、そこで生徒の考えられる反応は何かということを考えておきなさいと。想定しておくことは大切ですよね。

例えば、ディスカッションの問いを提示して、でも学生たちが全然議論できない問いであるケースもあるじゃないですか。この問いを出したら、今この学生たちならどういう話が出てきそうかを想像しておくことが、すごく重要だなと思いますね。グループワークなどの作業でも同じですよね。

中村：予期、シミュレーションをしておくことは絶対大事ですよね。今までの話とも絡みますけど、受け手の側に立って考える、学生の側に立って考えることも大切ですね。こういう発問をしたら学生たちはどう感じるのだろうか、この作業のやり方の説明で伝わるだろうかということを考える。授業をやりながら、常にそういうリフレクションというか、学生側の目線、もう一人の自分みたいなものを持っているかどうかが大事ですね。

中澤：そのためには、学生を知ることも大事ですよね。

中村：そうですね。グループワークの間も、なるべく先生は巡回して様子を見て、どんな話をしてるのかを小耳に挟んでみたいなことは結構大事な気はしますね。

中澤：大講義も含めて、リアクションペーパーを取っている先生は多いと思うのですけど。リアクションペーパーも役立ちますよね。

中村：いいと思いますね。モチベーションを引き出すのにも使えると思います。いいリアクションがあ

りましたという紹介も、許可取った上だったらできると思いますし。
中澤：そうですね。大講義でもいいし、アクティブラーニングのためにも「学生を知る」をぜひやってほしいところではありますね。
中村：学生を知ることは、確かに根っこの部分かもしれないですね。学生の立場になって考えると言っても、学生のことが分かってなかったらできないですよね。
中澤：それが学会発表との違いになりますよね。
中村：確かにそうですね。普段先生方がやっている論文を書くことと通じる部分もありますという話をしましたけど、違う部分もあって、それはその部分なんでしょうね。
中澤：アクティブラーニングに関して伝えておきたいことはありますか？
中村：よくいわれてることですけれども、アクティブラーニングという言葉自体は、オワコンとまでは言わないけれども、ブームはないですよね。僕はそれをあまり悲観的には捉えてなくて。アクティブラーニングをやることが当たり前なので、そんなことわざわざ言わなくたって、いいぐらいなので、と思っています。ただ、現状の日本の大学が、当たり前のことになったから言葉が廃れてきたのかというと、そこには自信が持てなくて。ただ廃れただけなのではないかという気もするので。
　僕が及ばずながらやっているのは、自分の所属している学会の懇親会の場で自分がどういうふうに授業をしているのかを皆さんに共有することです。そうすると、自分はこういうのやってるよって教えてくれる先生もいて、もちろん僕にとっても勉強になるので、地道にこれからもできることかなと思います。
中澤：「授業とはアクティブラーニング型授業である」という状況が一番の望ましい姿ですね。
　そこには至っていないところもありますが、昔よりは全然多くはなってはいますね。
中村：そうだと思いますね。だから、そんなに悲観ばかりはしていないです。
中澤：私は「軽めのアクティブラーニング」と「重めのアクティブラーニング」という言い方をします。軽めのアクティブラーニングは、講義にプラスして学生が少し話すようなものですね。「教員主導・講義中心型」（溝上 2014）ですね。重めのアクティブラーニングは、PBL をがっつりやるタイプの「学生主導型」（溝上 2014）ですね。アクティブラーニング型授業と言っても様々ですが、その点はどう思いますか？
中村：いまだにアクティブラーニングと言うと、重いものと思っている方が多いです。少なくとも僕の分野の学会で話をしていて、よく話を聞いてみると「先生アクティブラーニングやってますよ」と言うこともあります。軽いものをやってますよということが結構あるので。そのへんも、完全にそういう認識が普及してるわけではないなと思いますね。
中澤：いまだに言われますよね、大講義ではアクティブラーニングはできないと・・・。
中村：そう。それはほんとよく分からないのですけど・・・。
　模擬国連とかでもそうなのですよね。普通に模擬国連を行ったら、めちゃくちゃ重いアクティブラーニングになります。大講義では難しいのですけれども、ペアワークで役割を振って行ってもらうことがあります。「向かって右側の人はアメリカ、左側の人は中国」みたいな感じで考えるとか、それももちろんアクティブラーニングです。模擬国連簡易版、ロールプレイ簡易版みたいなことですよね。目的と可処分時間、クラスのサイズに応じて、使い分けるのが、本来大事なことなんですよね。
中澤：方法、目的次第でいくらでもできますよね。
中村：いまだに個人的に答えが見つかっていないのは、どうしてもグループワークしたくないとか、独りでやりたいという学生に、どういうふうに対応するのかということです。基本的には、グループワークの価値を伝えて、でも嫌なのですという場合には、独りで取り組むことをお認めしているのですけれども。これは、パーフェクトソリューションはない問題かなと思いますね。
中澤：そうですね。社会に出たら人と話しながら仕事を進めることが多いのですけれども、学生はそのように実感できないところもあるかもしれないですね。サークル活動の経験など、自分の経験とひも付けてくれると、伝わりやすいのですけれども。

　対談、いかがでしたでしょうか。アクティブラーニングのコツは、ご自身の授業でも取り入れてみてください。（中澤）

参考文献

溝上慎一（2014）アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換. 東信堂

◆ 今後の活動予定

　2025 年度 A セメスターも授業を開講し、引き続きアクティブラーニング型授業モデルの検討・開発を行っています。部門の活動に関する情報は、部門ウェブサイト（https://komex-ex.c.u-tokyo.ac.jp/ja/）で発信していきますので、ぜひご覧いただければと思います。

（奥付）
○発行年月日：2025 年 10 月 21 日
○発行：東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部 附属教養教育高度化機構 EX 部門
若杉桂輔・中澤明子
○連絡先：dalt@kals.c.u-tokyo.ac.jp
○Web サイト：https://komex-ex.c.u-tokyo.ac.jp/ja/